

(単純な) 主観主義

(文化・社会) 相対説 復習

- 「道徳は文化によって違う」
- 「ある文化が他より優れている、正しいかなどと判断する方法はない」

長所

- 社会・文化による習俗や道德観の違いは明白
- お互いの文化・見解の尊重
- 自分たちの文化を絶対に正しいと傲慢に思い込むことは避けるべき

短所

- より根本的な道德原理は同じかもしれない。（たとえば「あなたがしてほしいことを他の人にもせよ」）
- 誰もが認める普遍的な価値があるのではないか？生命、健康、友愛、自由～。

短所

- 文化の内部で批判するひとがいつも間違っているということになる
- 道徳的にどう変わっても、それが「進歩」だといえなくなる
- eg. 奴隷制の廃止

「社会」「文化」を 特定できるか？

- そもそも「文化」や「社会」というものがはっきりした境界をもって存在しているかどうかは怪しい
- 「現代日本の文化」とひとくくりにされることが多いが、関西だの京都だの若者だの中年だの学者だの学生だの、さまざまな属性を持つ人々の寄せあつめでしかなく、その個々の集団によって考え方のパターンは違っている

倫理学的主観主義

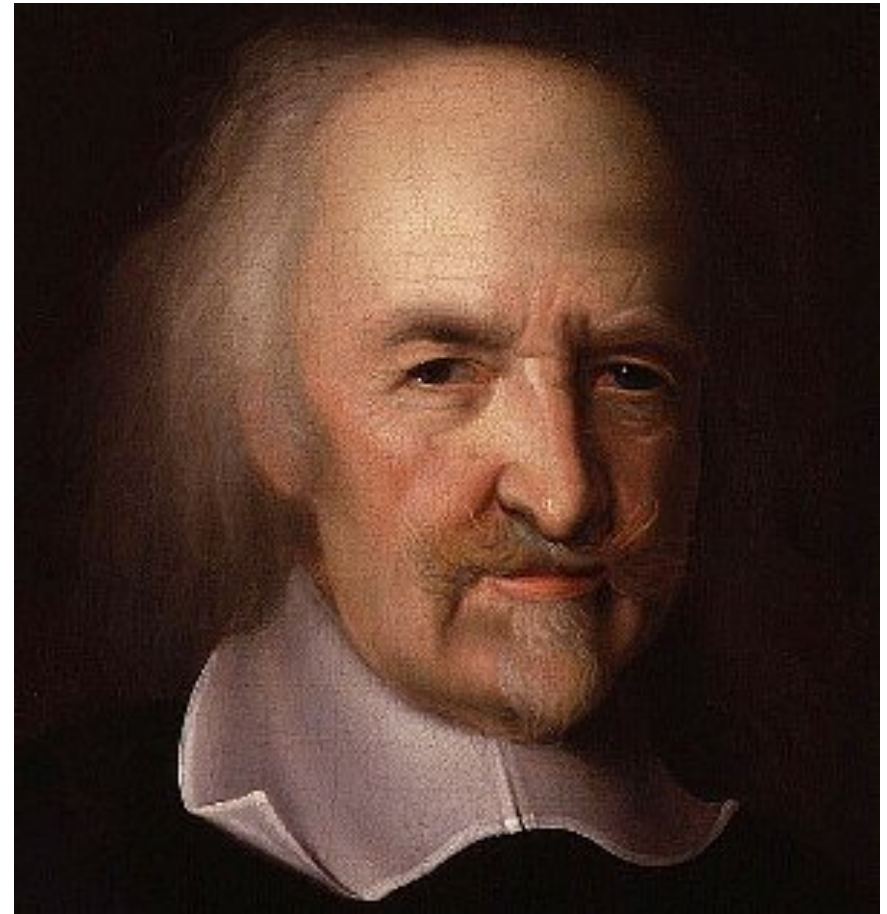
- 道徳に関するわれわれの意見は主観にもとづいている。（特に感情にもとづいている。）それはひとによって異なる
- （したがって）道徳に関して客観的な「事実」は存在しない

単純な主観主義

- 「～はよい」「～は正しい」は、その人の主観による判断にすぎない。主観は人によって違う
- 「Xはよい」「Xは正しい」などはすべて「私はXが好きだ」を意味している

ホッブズ

- トマス・ホッブズ(1588-1679)
- 『リヴァイアサン』



ホッブズ

「各人の欲求および欲望の対象がなんであるうとも、その人にとってはそれこそが「善」であり、また憎悪、嫌悪の対象となるものこそが「悪」と呼ばれる。そして軽視の対象は「とるにたりぬ」「問題にならぬ」ものである。」

「すなわち善、悪、軽視すべき、といったことは、つねにそれを用いる人間との関係において用いられるものである、単純に、そして絶対的にそうだというものはありえない。また対象自体の性質からとりだしうる善悪の一般的な法則もありえない。」

- ただし、単なる「よい」「悪い」と道徳的な「正しい」「不正だ」のあいだには違いがあるかもしれない

ヒューム

- デイヴィッド・ヒューム (1711-1776)
- 『人間本性論』



「ところで、美德や悪徳はその存在を理性によって推論することができるような事実ではないということを証明するのに何か困難がありえるだろうか？悪徳だと認められる行為、たとえば意図的な殺人について考えてみよう。」

いろんな角度から殺人について検討して、あなたが悪徳と呼ぶ事実や実在物を見出すことができるかどうかを考えてみよう。殺人をどんな仕方で取り扱おうと、あなたはある種の情念、動機、意志、思考しか見出さない。殺人の悪徳については、それ以外の事実は一切存在しない。

「対象だけを考察する限り、「悪徳」はあなたの目にはとまらない。あなたが自分の反省を自分自身の胸の内へと向けて、この殺人という行為に対する非難の感情が生じていることを見出してやっと「悪徳」を見つけることができるのだ。」

たしかに、ここに「事実」がある。だが、この事実は感情の対象ではあるが、理性の対象ではない。この「事実」はあなた自身のうちにあるのであって、対象のうちにあるのではない。

それゆえ、あなたがなんらかの行為や性格が悪徳であると言うときに意味しているのは、「あなたの本性の構造から、その行為や性格をよく見た結果、非難の感じや感情を抱いている」ということに他ならない。

単純な主観説への批判

- しかし単なる好き嫌いではない
- 自分としてはいやだ、嫌いだけど正しいと認めないとならないことがある
- 「僕はコーヒーが好き」 「私は好きじゃない」 OK
- 「浮気は悪い」 「かまわん」？